

性のない連続がみられる。接続のことばの乱用は、話し言

いうことがないために

一、送りがなやかなづかいが不用意にも誤っている。書いた後で自己の作品を推敲しなせば是正出来るものが多い。

二、句読点が理解されていない。

三、助詞の誤用や脱落。

四、段落が鮮明でない。

五、くりかえしが多い。

六、接続のことばの多用。

七、あて字や習得の不確かさからくる誤りが多い。

の諸点が挙げられる。

これらの問題が解明されることにより、作文指導上の難点や彼らの学習における抵抗も自然和らぐものと信ずる。

若山牧水

(人間性とその芸術観について)

森 麗 子

明治三十年から四十年にかけての歌壇はまさに「暴風と怒濤」の時代であった。

因習的和歌と御歌所の歌壇の倦怠の中で、現状打破、旧套改革の反旗を挙げて、より高くより美しい生を空想の綾

で華麗に染めあげようとした新詩社の浪漫主義短歌も、晶子の歌集「舞姫」をその頂点として徐々に下火になつていった。

そうした浪漫主義への訣別として、あるいは新しく起つた自然主義への橋渡しとして前田夕暮と共に若山牧水は存するのである。

故にともすると牧水は浪漫主義への反逆者であり、単に自然主義の歌人としてのみ論ぜられている。しかしそれはあくまで「情緒におぼれ、人工の小楽園に白昼夢をむさぼる」かのような、明星への反逆であり、「有限なる生の彼方に無限の憧憬をよせる」浪漫主義そのものへの反逆では決してあり得なかつたと信ずる。

ここで私は、自然主義歌人牧水としてでなく浪漫詩人牧水と云う見地に立つて、彼と関係の深い幾つかの方向から人間牧水の内面世界にスポットを当ててみたいと思う。

牧水と自然、それは切り離して考える事は不可能な程密接な関係を持つている。牧水文学のすべては、そこに根源を發し、そこに帰着すると云つても過言ではない。

「自然の一部としての人類人間」の考えに立脚して、自己の追求を自然の裡に求めたのである。多くの浪漫主義文学者が又そうであつたように、そこにこそ浪漫派牧水の詩精神の表われを見る事が出来よう。

又、牧水の自然は汎神論的自然であり、「自我即自然」

である点注目される。自然は自我との間に何等障壁を持たず、自然の呼吸はそのまゝ作者の呼吸に繋つた。

然らば牧水のこうした自然観はどうして生れたのであろうか。もちろん先天的に牧水の裡に自然に対する、自然愛と云うものの素因が存在したと云える。しかしそれを更に助長し發展せしめたものは、彼が生れ、育つたふるさとの環境であつたと云えよう。山と山に囲まれた峡谷、人の愛玩を拒むような厳しい、しかしそれ自身の生命を持つた自然界の中で、それ自身の持つ孤独と寂寥とを全身で受け止め、消化しながら少年牧水は成長した。

云わば牧水の自然は「自然愛」と「自然人」の合成の上生まれたと見る事が出来よう。

しかし牧水に於いても、すべての生命あるものが大自然と完全に一致してしまわない所に悩みがあつた。それは彼が一生をかけて解決しなければならぬ課題であり、牧水のロマンチックな、雄大な世界苦であつた。

又牧水の文学を論ずるに當つて、恋愛も無視する事は出来ない。恋愛も又牧水文学の新しい出発点であり温床であつたから。

処女歌集へ海の声Vからへ独り歌えるVへ別離Vを通して、その基調をなしているのは一人の美しい女に対する相聞歌である。

牧水も又詩人の多くがそうであるように、そして浪漫派

の詩人に特にその傾向が著しいように、常に何かを夢み、憧れていなければ生きられない人間の一人であつた。恋も又そうした詩人の魂の抛り所であり、憧れやまぬ孤独者の病床であつた。

恋愛に於いて最もよく彼の自我は自然と融け合つた。そこに彼の恋愛が吉井勇や北原白秋等の官能的、近代的な都會情緒とは対象的な著しく主観的、自然的であつた原因があると思われる。言葉を変えれば、牧水は恋愛に陶醉すると同時に自然に感溺した。まさに、牧水、恋愛、自然は三角関係にあつたと云える。しかし元々有限なるものの中に無限なるものを求め、現実の世界に現実を超越したより完全なるものを求める詩人の世界では、やはり牧水も傷つかねばならなかつた。それはその恋愛自体が現実の中にしつかりと根を下した現実的地盤に立つたものではなく、孤独と寂寥からの逃避として求められ、作者自身によつて仮想された、云わば自己の世界内の出来事に過ぎなかつた故と云えよう。そして一つの炎が消滅した後に残るものは、自己への虚しい悔恨と、自嘲と、前にも増して寂しい孤独感とである。しかしなお負つた傷口を撫で乍ら、新しい「何か」を求めて生命の火を燃やし続けたのが牧水の真の姿であつた。多くの浪漫詩人がそうであつたと同じように。

牧水程酒を愛した人も又少ないであらう。牧水の居る所常に影の如く酒があつた。「恋愛と酒の陶醉は、浪漫派の

牧水も又詩人の多くがそうであるように、そして浪漫派

常に影の如く酒があつた。「恋愛と酒の陶醉は、浪漫派の

性格である」とシュトリヒが云つてゐるように、ここにも浪漫詩人としての牧水の姿の一端を見る事が出来るのである。酒に対する牧水の態度は終始一貫して盲目的、没我的であつた。

彼は単に味覚で飲むのではなく、心で酒を飲んだ。現が渴く時、孤独に耐えきれなくなる時、彼は独りの酒を味わつた。そして孤独な魂の傷口を涙と親愛の情を持つて愛撫し、孤独と寂寥に自から没んでいくのである。それは性格的な弱さと、浪漫詩人の感傷であり、唯一の逃避所であり得たからであらう。

人を愛し、自然を愛し、恋を愛し、愛する事に徹しないではいられなかつた牧水も、酒を愛する事に最も徹したのではあるまいか。それが決して裏切る事のない完全な地上天国であり得た故に、そして又そこに於いてのみすべての虚偽や現実の汚れから離れて、自己の孤独と悲哀とを自ら棄しむ事が出来たが故に。それはたしかに逃避であり、敗北であらう。しかし又そうせずにはいられなかつた牧水の精神をも決して見逃す事は出来ないであらう。

酒を詠んだ歌には今なお名歌として愛誦されている作品が少くない。それはとりもなおさず、そこに盛られた詩情が、時代の流れとは無関係に現代人にも触れ得る何かを持つてゐるからに外ならない。そこに牧水文学の永遠の若さと、真実とがうかがえるのである。酒はまさに「二十年来

の親友」であり、その生涯は酒に尽きたと云つて過言ではない。

幾山河越えさり行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく

牧水と云えばこの歌が思い起される程、我々の裡に深くしみ込んでゐるこの歌が、旅の歌である事を考えても、彼が如何に旅を愛した歌人であるかがうかがえる。

この歌が今なお、我々の心を捕えて離さないのは、この歌が再び返らない青春の愛惜と深く結びついているからであり、又永久に充たされる事のない人生の旅が、この歌の中に象徴されているからであらう。

「寂しさのない国」を求めて幾山河、それが真実と自由を求める生命の欲求から来る旅である限り、現実の世界に於いては決して満たされる事のない無聊の旅に終るしかないのである。寂しさのない国は恐らく永遠に到達する事の出来ない国であらう。又それ故にこそ求めずにはいられない国でもあるのであるが、ドイツのローマン詩人、カール・ブツセの「山の彼方の空遠く幸住むと……」の詩とよく比較されるが、そこに「幸住む国」と「寂しさのない国」の相違はあつても、現実には充たされないもの、そしてなお求めずにはいられない、人間の強い、しかし哀しい憧憬と祈りとを感じさせる点に於いて共通している。それは常に孤独者の祈りであり、浪漫主義者の共通のイデーでもあ

る。

彼の一生は旅に明け、旅に暮れた。まるで憧れを追いもとめるように、その旅もほとんど日本全国、朝鮮にまでも及んでいる。そしてその旅の間に多くのすぐれた紀行文や歌を残している。彼の紀行文が高く評価される理由の一つは、文章のいたる所に自然が躍動しているからであろう。

彼が旅を愛する心の一つは、寂寥や孤独を自分の、と云うより人間の本来として認めた上で、あるいは免れ難い宿命として甘受した上で、その中に自から自己をゆだね、自からの孤独と寂寥とを更に更に深め、それを享樂し、あるいはそこに安住しようとする、自虐的、逃避的態度がうかがえる。

云い変えれば孤独と寂寥を与えてくれる場所として、自然を求め、その場所を求めて旅を続けたと見る事も出来るであろう。

酒が心の欲求からもとめられたように、旅も又多くの場合、心を遣うための旅であつた。反面又それは性格的な弱さによるものでもあつた。旅から旅へ憧れ歩く事に、不安と懷疑をいだきながらも、やはり何かに追われるようにさまよい続けたのである。

旅は彼にとつて人生の縮図であり、そこには人生と云うものが象徴されていたと云い得る。

又云うまでもなく牧水が旅を憧れる心の一つには純粹な

自然への愛、自然への復帰と云う事をも見逃すことは出来ない。——それは又、とりもなおさず生命の安息所を求める生命の欲求から出たのであるが——。

牧水の旅は徹頭徹尾旅するための旅であり、人生の旅であつた。旅というよりむしろ、放浪とか漂泊とかの言葉の方がふさわしい旅であつた。彼にとつて旅は、自然に、人間に、無限を求める思慕である。結局、

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや

と旅のさびしさをかこちながらもなお、

今日も又心の鉦を鳴らしうち鳴らしつつ憧れてゆくのが浪漫詩人牧水の本来の姿であつた。

「私は私の歌を以つて私の旅の一步々々のひびきであると思ひなしている。言い換えれば私の歌はその時々私の生命の碎片である。」とその歌集へ独り歌えるVの序で云つている牧水の芸術観(短歌観)は又漂泊の人牧水にふさわしい浪漫的なものである。

牧水にとつて短歌はまさに「不治の病者の枕もとの薬」であり、「みずからうたう子守歌」であつた。そしてまた「宇宙に存する我を知悉せしむる努力」でもあつた。

牧水には彼自身も認めているように、理路整然たる、いわゆる学問的な歌論と云うものはない。しかし、それらに劣らない強い信念と云うものはいつの場合にも失われな

又云うまでもなく牧水が旅を憶れる心の一つには純粹なつた。歌を詠む彼の作歌意識の底流には常に、「歌は鏡であり、呼吸である。」と云う強い信念があつた。彼の芸術の対象は、すべて自己であり、自己を発掘し、自己を全うする事が彼の芸術に課せられた使命であると考へた。

「短歌信者」と云う言葉が彼の作歌する態度を最も正確に端的に表わしている。

歌はあくまでむずかしい学問や、社会や、屁理屈ではないと主張する彼の芸術観が、ともすると、彼の理論に論理性を欠き、社会性の欠如を指摘される素因ともなつて来るのであるが。

短歌の形式や言葉や調べについて、いわゆる短歌と云う文学ジャンルの実質的な諸問題に關しての彼の考へはどうであつたか。

先ず形式について見ると、あれ程絶対視し、神聖化した短歌のいわゆる三十一文字の形式について、まつたく不満も疑問も持たないわけではなかつた。彼の一生が、憧れと失意と、再生の繰り返しであつたように、短歌に対する彼の態度も又、たえざる苦難と確信の争ひであつた。

他の多くの浪漫派の詩人達がそうであるように、牧水も又、自己の芸術により「完璧」である事を求めた。自己と作品との間の埋め尽せない隙間、それは耐え難い事であつた。彼の選んだ短歌と云う形式が三十一文字と云う限界を持つ事を、しかし彼はやはり讚美した。

劣らない強い信念と云うものはいつの場合にも失われな

牧水に於いて芸術は、形式や限界を超越した内面的な側面、すなわちそこに盛られたものの価値に於いてのみ問題となり得るのである。彼の一生の作品を通じて見ると、その苦惱と変遷の跡がはつきりとうかがえる、彼の才五歌集△死か芸術か▽△みなかみ▽に於いて一時見られた、いわゆる破調の歌と云うものが、次の歌集△秋風の歌▽になると、まつたく影をひそめ、そしてそれ以後ついに三十一文字の短歌形式を破つた歌は姿を見せなかつた。

次に言葉についてみよう。歌に於ける言葉は或る出来事を伝えはするが、出来事そのものではないと云うのが彼の言葉に対する持論であつた。

三十一文字のどの一字に触れても、作者の魂の温かさを感ずるような、言葉そのものが生命を持たなければならぬと主張する。そしてその可能性を信じて疑わなかつた。

日本語のよい所を極度にまで結晶させたいと云うひそかな野心を燃し乍ら、短歌にひたすら自己の生命を托し、歌いつづけたのである。

では作歌上の問題である「写生」とか「技巧」とかの問題について彼はどう考えていたであらうか。そこにも「歌は生命なり」と云う彼の強い信念がのぞかれる。根岸派の人々が「写生々々」とまるで写生のみが短歌の命でもあるかの如く尊重するのに比して、牧水は、「練習としての写生」「手段としての写生」と云う態度で処している。彼

にとつて、要は自己の生命を如何に完全に、あるいは豊かに作品化するかが問題であり、そうした意味での写生は認めても、単にありのまま、そこに居るもの、存在するものを写し取る事は不必要であり、むしろ邪道でさえあつた。

技巧についてもまったく同様の事が云える。文字や言葉に血の氣を通わせ、よりよく表現するための技巧の必要性は認めているが、いわゆる技巧のための技巧、例えば、新詩社の人々が、空想の変化と、多彩な色彩感覚とで、巧みに、濃艶に彩色したような、そうした類の技巧を極度に批判し、攻撃している。

韻律、すなわち歌の調べについてはどうであつたか。短歌の音楽的、韻律的美しさは牧水短歌の一大特色をなしている。

彼の歌が今なお、多くの人々に愛誦される原因の一つはたしかにそこにあると思われる。

抒情詩は一般に、本質的にその音楽性と結びつく。又情緒の内面的音楽化は浪漫詩人共通の課題である。彼の調べに対する考え方は、「歌は理ものにあらず調ふるものなり」と云つた香川景樹の歌論に通じ、「筆勢すなわち調べである。」とする窪田通治の歌論とも共通している。

牧水の短歌には度々、社会性、現実性の欠如が指摘される。そしてある場合には、それが牧水文学の致命傷となり得る場合だつてある。いかにも彼の作品を読んで、そこに

生々しい現実社会の叫びや、不満やを聞く事は不可能に近い。たしかに世界に向つての牧水の関心は極めて冷淡であり、個人的であつたかのように見える。しかし、それは彼がまったく外的世界とは没交渉に、あるいは全然無関係に生きたからと断定する事は出来ないと思う。多くの人々が現実性、社会性を取り挙げた作品の数の少なさから、彼の歌がまったく歌人的世界に於いてのみ詠まれ、それはそのまま、世界観の狭さによるものであるとされているが果してそうであらうか。

むしろ、意図するとしなにかかかわらず、めまぐるしい、汚れた現実社会への反抗と、彼の純粹な詩精神に拠ると私は思う。そしてそれを支えているのは、芸術は、歌は鏡であり、自己であり呼吸であると云う彼の強い芸術観に他ならない。

芸術が（歌が）現実社会、日常生活を単に写し、報告するものであつたならば、彼にとつて芸術は無意味であり、不必要であつた。

なお彼の芸術観を語るに於いて、最も重要な事は、今更云うまでもない事であるが、「わが芸術はわが死に尽き、わが生は芸術に尽く」と云う彼の強い信念である。事実、彼の生涯は歌に尽き、歌は彼の生涯であつた。

学問や理屈を抜きにした、裸のままの生命で、自分の信ずるものにつかつて行つた彼の態度は、やはり短歌信者

る。そしてある場合には、それが牧水文学の致命傷となり得る場合だつてある。いかにも彼の作品を読んで、そこに

牧水の名にふさわしいものであつたと云える。そして又そこにこそ、今なお我々の心を魅せずにはおかない牧水文学の永遠の若さと、ロマンチックな、しかし強靱な何ものかが秘められているのであろう。

以上、牧水の人間性、あるいは彼の芸術観について小さな論証をこころみただけであるが、結局、牧水を論ずると孤独と寂寥の歌人と云う事が云えるであらう。それは又浪漫主義文学者の一般的特質であるとも云えるのである。

或時は我と我が情熱に酔い、又或時は自嘲の苦き涙に寂寥の遺憾なさを酒に逃れてみても、結局、何かを求め、何かを懂れていなければならぬ孤独な詩人である事に変わりなかつた。酒も旅も恋も、所詮、魂の刹那的な避難所ではあり得ても、安らかな安住の場所ではあり得なかつた。しかしなお強いて云うならば、彼を育て、彼が常に小羊のようにそこへ歸つて行つた自然のみが、彼を温かくつつむ、わずかな安息所であり得たのかも知れない。

しかし又云える事は、孤独と寂寥とは人間存在の宿命であるとする前に

われ歌を歌えり今日も故わかぬかなしみどもにうち追われつつ

と感情に引きずられるのが詩人牧水の、そして又人間牧水の真の姿でもあつた。

彼の生涯は、生活上でも、又芸術の上に於いても彷徨と

学問や理屈を抜きにした、裸のままの生命で、目々の存するものにぶつかつて行つた彼の態度は、やはり短歌信者

動揺の絶えざる繰り返しであつた。その繰り返しの中でお、「寂しさのない国」を求めてさまよつたのが浪漫詩人牧水の真実の姿であつた。

又そこにあの香り高い牧水文学の抒情の花も咲き得たと思われるのであるが――。

古今和歌集における本歌取考

内田千佐子

古今集の歌には万葉集との類似歌が多く見られる。その一例である、

題しらず

よみ人しらず

昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく(巻四、秋上、一七二)

は、時の推移のはやさに驚いた心を詠んだものであるが、「昨日こそ……しか」という語法は万葉集中に次の四例を見出すことができる。

昨日社公者在然不思爾浜松之於雲棚引(卷三、四四四)

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾来

(卷十、一八四三)